

持続可能な「環境モデル都市」横浜に LRT を走らせるために

NP0 法人 横浜に LRT を走らせる会 副理事長 古川洋

横浜の都市デザインと路面電車

横浜は人口 360 万人を擁する大都市である。1859 年（安政 6 年）の開港以来 150 年にわたって外国の先進的な文化や文明を取り入れきたトップランナーであることから、横浜市民は「まち」に対して市民であることの誇りと自負を持っている。そのまちは、時代の変化に合わせて姿を変えて来ている。横浜の市電は、1904 年（明治 37 年）に横浜電気鉄道として営業を開始し、1921 年（大正 10 年）に市営化された路面電車は、2 年後の関東大震災を乗り越え、路線の拡幅や延伸を行い 1956 年には総延長 51.8Km となったが、60 年代に始まったモータリゼーションの発展にともない、軌道敷内走行が許可されたために自動車交通の渋滞に巻き込まれ、結果として経営が悪化し、1966 年に地下鉄の建設決定と同時期に時代遅れで交通渋滞の原因と考えられた市電廃止が決定されている。自動車交通のための道路空間需要が高まる中、1972 年に全ての路線が廃止されてしまい、現在のように市営地下鉄と路線バスに道を譲ってしまった。一方、自動車交通の利便性向上のために市内に自動車道が張り巡らされ、現在も建設が継続されているが、昨年逝去された都市計画家田村明氏は都市景観を守るために関内駅近くを通過する自動車専用道を地下に建設させたことでも有名である。特に横浜の中心市街地、桜木町・関内・関外地区の伊勢佐木町のアーケードの先進性、馬車道の歩行者空間デザイン、また元町商店街の道路空間デザインと荷捌きシステムなどは都市デザイン関係の書物や教科書にもしばしば登場している。また、みなとみらい地区の大規模開発は、スカイラインのデザイン、赤レンガ倉庫の再開発、美しい夜景などにより現代的な魅力を持った観光地としてのポテンシャルも持っている。

「横浜に LRT を走らせる会」の設立

横浜に LRT を建設しようという動きが始まったのは、2000 年初頭であった。当時、京都議定書の調印が世界的な話題となり、各国政府が地球環境を守るために温暖化ガスの削減に関するコミットメントを行い始めた時期である。環境専門家などにより、横浜の市街地の大気がいかに汚染されているか、児童の喘息罹患率が全国平均と比較して高いかなどデータが示されていた。そして 2003 年に都市交通と LRT をテーマにした比較的大規模な市民集会が開催され、特に 中区本牧地区は横浜の中心部に隣接しているにもかかわらず、既存の鉄道駅からのアクセスが不便なために住民は自嘲的に陸の孤島と呼んでいるが、その本牧住民たちが中心となり LRT の必要性に声を上げた。この本牧地区はかつて市電が走行しており、廃止とともに路線バスに切り替えられたところである。現在も路線バス利用者は日平均 5000 人の乗降があり、日中はバスが 3 台連なって走っていることもしばしばである。この住民たちの声に同調する形で都市生活環境の改善を求める市民も合流し、その年の 12 月に会員数 100 名超で「横浜に LRT を走らせる会」（以下、「走らせる会」）が誕生した。会の名称は直接的であるという指摘もあるが、人と環境に優しい LRT の先進性をシンボリックに捉え、かつ目的を明確にすべく「横浜に LRT を走らせる会」という名称が多数決で決定された。翌 2004 年には NP0 法人登録を行い、他の横浜で活動する交通・まちづくり・環境・福祉関係の諸団体などと協力・交流しながら今日まで活動を継続している。設立当時には、エルアールティと発音しても、市民多くは一体それが何を表しているのか理解していなかったため、LRT の説明に多くの時間を割いた。現在は、広辞苑にも載っており、マスコミにもアルファベットでしばしば登場するようになり、LRT に関する理解と都市交通手段としての認識されてきていると言える。

「走らせる会」の活動

「走らせる会」には、事務局の他、フォーラム広報チームと企画チームがあり、活動を行っている。フォーラム広報チームは、年2回のフォーラムの開催、商工会・まちづくり団体・自治会・町内会などへの出前説明会の実施、定期刊行ニュースの発行などを行い、企画チームは、計画路線の提案、LRT 問答集（Q&A 集）などの資料・宣伝ツールの作成、アンケートの実施とまとめ、事業運営形態や採算性の検討、関連研究や知識の共有化などを図っている。



また、「走らせる会」では、ヨーロッパの催しと呼応して横浜の市民団体が中心となって毎年9月に行っている「横浜カーフリーデー」において、フランスのリヨン市やストラスブール市、ドイツの諸都市のデザインが優れているLRVの写真や想定路線パネルの展示をしたり、参加児童を対象にしてLRTやBRT車輛の塗り絵コンペを行などして新しい形の公共交通システムに対する宣伝を行っている。このぬり絵は優秀作品を選び、12月～1月の冬休み期間中に磯子区滝頭の横浜市電保存館において入賞者の授賞式と作品展示を行なっている。また、宣伝のためのLRTを説明した会のパンフレットを作成し、日本初のLRT絵本「子ねことふしぎな電車」の出版を行っている。（注文は、lrt_ehon@yahoo.co.jpまで）



「走らせる会」は年に2回、「横浜の公共交通活性化をめざす会」との共催で夏・冬にフォーラムを開催しているが、それらフォーラムでは、公共交通・観光・コミュニティバス・まちづくりなど都市における交通のあり方にかかわる様々な切り口から、冬は「公共交通」をテーマに、夏は、「LRT」をテーマにして、横浜で活躍している市民運動家や全国から専門家や行政マンを招いて先進的な事例やコンセプトの紹介を行っている。フォーラムでは毎回コンスタントに100人程度の参加者があり、市民に混じり、国政・市政の代議士や市の職員も顔を出し、マスコミにも取り上げられるなどそれなりの成果を上げている。さらに頻繁にはないが、会のメンバーが小中高校において出張授業や市の地域で出前プレゼンを行なっている。

最近の活動紹介

2011年7月2日に横浜みなと博物館において行われた最近の「2011夏LRTフォーラム：都市・横浜の魅力づくりとLRT」では、第1部の基調講演で、(財)計量計画研究所の竹内佑一氏が、21世紀の都市づくりは20世紀の都市づくりから脱却し、「成長の限界」を認識して3つのテーマ「暮らしやすさ」「持続可能

性」「障害許容力」が大事であると説明し、都市と交通の関係では、土地利用と交通のバランス、公共交通の活用が重要であり、LRT 実現には、普及を阻む「意識」「技術」「制度」の過去のしがらみや既成概念の3つの壁があるとしながらも、期待を抱かせる「若干の光」も見えてきたのではないかと話された。もう一人の基調講演者、横浜市発展記念館の調査研究員の岡田直氏は、「市民に愛された市電」と題し、横浜の市電は、開港後市域が拡大・発展する中で、明治37年に横浜電気鉄道として神奈川～大江橋間が開通し、その後、路線は市街地に網の目のように延伸し市民の足として愛され、やがて関東大震災や戦災を経て、戦後も活躍したが、モータリゼーションの波に押されて昭和47年に廃止されるまでを時系列に沿って分かりやすく話された。また、一般に路面電車が存続している都市の路線沿線は賑わいがあり活性化しているという指摘もあり、かつての市電の路線は網の目のように張り巡らされていたが、現在は横浜駅への一極集中が過ぎていて、特に関内・関外地区の地区間を移動する手段は乏しく、何らかの形で市電を残すという選択肢は無かったのだろうかとの指摘もありました。第2部では、「走らせる会」「公共交通の活性化を目指す会」の活動報告と平成23年度活動方針の説明とパネルディスカッションを行った。



また、2011年4月10日の横浜市議会選挙（統一地方選挙）にあたっては、142名の市議会立候補全員にLRTに関する公開質問状を送付したところ、8日の締め切りまでに32名の候補者よりメールとFAXで回答があった。第一義的目的は、候補者にLRTと「走らせる会」の活動を知っていただくということであったが、寄せられた回答では55%以上が「LRTは都市の活性化や環境問題の視点から有効な交通手段だ」とし、当選の暁にはLRTの導入を進めるとした。また反対は15%に過ぎなかった。是非を明確にしなかった30%の候補者からは、「個人的には賛成であるが、市の財政状況、費用対効果、道路状況、市民ニーズを考慮し検討すべき」とあり、実現へ向けた課題の指摘も行われている。LRT導入に賛成した18名のうち5名が当選している。「走らせる会」では、賛成された市議には積極的にアプローチして協力関係を模索したいと考えている。

次回の冬のフォーラムの企画紹介

横浜の公共交通活性化をめざす会と横浜にＬＲＴを走らせる会では、冬季は公共交通をテーマにしたフォーラムを開催しますので奮ってご参加いただきたい。３月１１日の東日本大震災は、東北地方に未曾有の大被害をもたらし、原発事故の影響もあって戦後最大の災害になりました。首都圏は震度５強で比較的大きな被害はなかったが、ＪＲや私鉄の電車は運行を停止し、多くの帰宅困難者が生まれ大混乱に陥りました。その当日、鉄道事業者や行政はどう対応し、市民や企業はどう対処したのか、その検証とその後の災害に備える方策はどのように進んでいるのか。日頃、公共交通の問題に取り組んでいる団体として、「震災と交通」というテーマの中で、「帰宅困難者問題」を取り上げ、当日の鉄道の不通と復旧状況、路線バスや鉄道の代替バスの状況、道路の状況、そして避難所の状況などについての検証を分析し、かなりの高い確立で想定される次の災害に備えてどのような方策を考えるのかを、フォーラムで報告し、議論し、その分析が少しでも市民に役立つ情報として提示出来ればと考えています。

日時と会場：

- ① 日時：２０１２年１月２９日（日）午後１：３０～４：３０
- ② 会場：横浜市情報文化センター・情文ホール（収容人数２３９名）

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 番地

<http://www.idec.or.jp/shisetsu/s6-jouhou.php4?f=jouhou/6-map.htm>

当日予定プログラム：

- ① 特別基調講演：大震災を俯瞰的にとらえ、何が起き、どう対応し、復旧・復興に向けて、日本はどうするのか、日本人はどう行動するのかを総合的に提示する。
- ② 基調報告：震災当日の首都圏の公共交通はストップし、交通は麻痺し、多くの「帰宅困難者」が生まれたが、何が起き、何が問題だったのか、代替輸送対策はどうだったかなどを検証し、次なる備えや方策はどのようにすれば被害を軽減出来るのかを提案する
- ③ 各種報告：行政関係者、鉄道事業者、バス事業者、企業、その他
- ④ 質疑と討論：講演者、報告者との質疑応答
- ⑤ 「帰宅状況調査」アンケート結果の分析報告：３月１１日の各個人の帰宅状況（移動経路）の実態を調査・把握するための調査アンケート結果と分析を発表。

全国との連携

さらに、全国路面電車ネットワークとの連携も行っており、全国レベルで開催される「人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」においては準備活動から参加しており、２００８年には当地横浜国立大学キャンパスにて、横浜の他団体とともに「第３回人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」を開催し、阿部守一副市長（現長野県知事）から環境にやさしい公共交通整備に関する前向きな発言をしていただいている。また、国土交通省の「地域公共交通の再生と活性化法」の成立へ向かった全国レベルでの活動や「交通基本法」制定へ向かう運動などにも積極的に参加している。

結びに

まだまだ横浜においての LRT 実現には幾多の越えなければならないハードルがあるかもしれないが、徐々にではあるが市民と行政関係者において LRT を含めた都市交通環境改善の必要性に対する理解が拡がりつつある。いまだ会の運動は 10 年に満たない。都市人口の高齢化の進展や地球環境に対する意識の高まりの中で、持続可能な都市と交通のあり方へのパラダイムシフトが求められている。そういった意味において「走らせる会」の運動は単なる交通の問題を対象としているだけではなく、一人一人の将来のライフスタイルの選択の問題に係わるものである。より環境にやさしく、より住みやすい生活環境の実現のために努力していくことを「走らせる会」のメンバー・サポーターの皆さんとともに誓いたい。

NPO 法人 横浜に LRT 走らせる会

副理事長 古川 洋

会のブログ <http://lrt.cocolog-nifty.com/>